

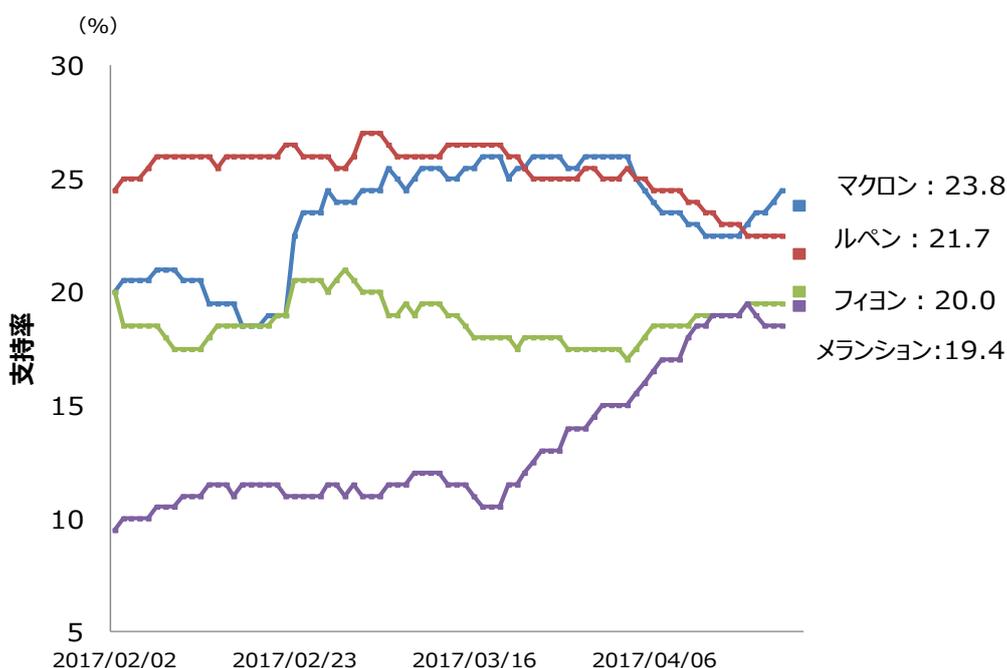
仏大統領選挙第1回投票結果：

“テイルリスク”ほぼ払拭でも残る政治リスク

4月23日の仏大統領選挙第1回投票の結果、極右政党・国民戦線(FN)のルペン党首と中道・独立系候補のマクロン前経済・産業・デジタル相が5月7日の決選投票に進出する見通しとなった。

23日投開票の仏大統領選挙第1回投票は、開票率90%の段階で、仏内務省の暫定予測ではルペン氏の得票率が23.8%、マクロン氏が21.7%となっている。事前調査以上の接戦となったが(図表1)、想定シナリオ通り、無事マクロン氏とルペン氏が決選投票に進んだ。

【図表1：仏大統領選挙各候補の事前支持率予想(2/1~4/21)と実際の得票率】



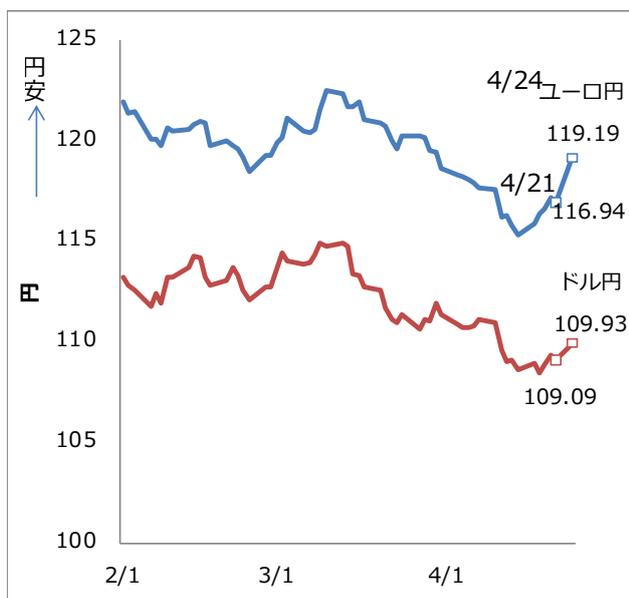
(出所)IFOP、仏内閣府、ブルームバーグよりマネックス証券作成。数字は90%開票段階での仏内閣府発表の得票率予測

終盤に躍進した左派・メランション氏が直前の世論調査以上に票を伸ばしたものの一步及ばなかった。結局、前回 2012 年の選挙と同様の 80%前後という高い投票率となったことが、大きな波乱を回避するのに一役買ったとみられる。

第一回投票終了を受け、調査機関は、早くも決選投票の見通しを発表し始めている。マクロン氏の決選投票での勝利予想は 62%程度と、ルペン氏の 38%から大差をつけている模様である(IPSOS)。

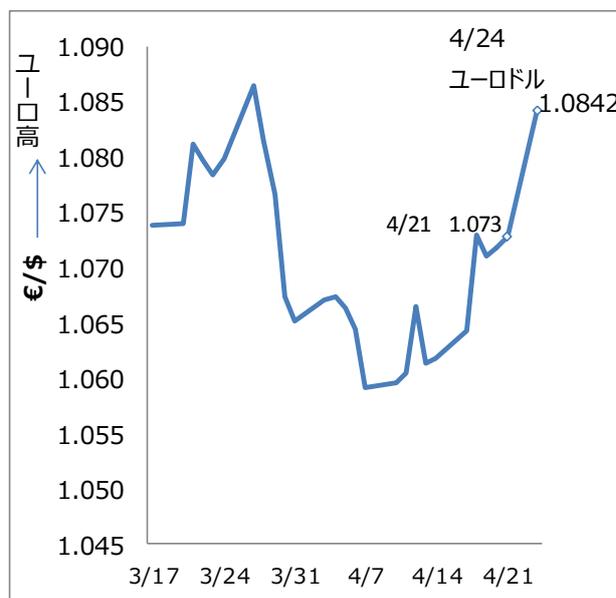
たとえ確率的には低かったとしても、ルペン氏勝利の場合の市場影響度は、ユーロや欧州株に対して 2 割前後の下落要因とも予想されていたことから、確率×損失額で考える期待値としては決して無視できない水準だった。このため、選挙後に為替が対ドル、対円ともにユーロ高に振れていることも納得できる。ドル円についても、リスク回避の円買いの巻き戻しや、先週末以来のトランプ米大統領の税制計画への期待も加わって、円安に触れ、ドル円は 110 円台に一旦戻す場面もあった(図表 2、3)。

【図表2】ユーロ円とドル円の推移



(出所) Bloomberg。4/24 9:30時点

【図表3】ユーロドルの推移



もっとも、引き続き、決選投票まで 2 週間もあり、北朝鮮問題、英国総選挙などの政治要因も燻っていることから、一気に円安/リスクオンに進むかどうかは不透明である。

さらに今回の選挙では、右派・左派という違いはあるにせよ、EU 不支持のルペン氏とメランション氏が

合計 4 割にも上る支持を得たことにも留意すべきである。フランスは、EU 提唱国の一つであり、現在の EU 体制の中核である。そのフランスで反 EU 派が躍進しているという事実は、EU というシステムの中長期的な存続可能性への脅威である。今後も EU 離脱がさまざまな国で繰り返し問題になることは間違いないだろう。

ご留意いただきたい事項

当社は、本書の内容につき、その正確性や完全性について意見を表明し、また保証するものではありません。記載した情報、予想及び判断は有価証券の購入、売却、デリバティブ取引、その他の取引を推奨し、勧誘するものではありません。過去の実績や予想・意見は、将来の結果を保証するものではありません。提供する情報等は作成時現在のものであり、今後予告なしに変更又は削除されることがございます。当社は本書の内容に依拠してお客様が取った行動の結果に対し責任を負うものではありません。投資にかかる最終決定は、お客様ご自身の判断と責任でなさるようお願いいたします。本書の内容に関する一切の権利は当社にありますので、当社の事前の書面による了解なしに転用・複製・配布することはできません。内容に関するご質問・ご照会等にはお応え致しかねますので、あらかじめご容赦ください。

マネックス証券株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第165号
加入協会: 日本証券業協会、一般社団法人 金融先物取引業協会、一般社団法人日本投資顧問業協会